

九州方言の特異性（五）

吉町，義雄

<https://doi.org/10.15017/2557109>

出版情報：文學研究. 5, pp.73-104, 1933-07-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

九州方言の特異性 (五)

吉^{よし} 町^{まち} 義 雄

補 正

九大國文學第一號(昭和六年九月)

○四九頁十三行 吏讀は「レ」を發音されるのであつて、「音聲學協會會報」第廿六號(昭和七年四月)の「コトクマ往來」(325)参照。尙開寧寫項寺の此の文獻は「朝鮮金石總覽」上(大正八年三月)の如く石塔記なる名稱の外に、吉澤博士の「語脈より見たる日本文學」(「日本文學講座」「國語說鈴」所收)に於ける如く東

塔記も呼び得、小倉博士に由るに造塔記とも言はれるさうであり、新羅の天寶十七年即ち我が天平寶字二年(七五八)に成つたのである。

○五一頁十六行 何れも卷第二十の「東歌」の條。
○五三頁二行 貴重圖書影本刊行會(京都市、便利堂)が昭和五年四月に複製刊行した近衛公爵家所藏の所謂「承德本古謠集」に見える

肥後風俗

之止字太奈、太利太奈、之止字千良々、之止字千良、太利太奈、之止

九州方言の特異性

宇千良々「止宇安利」太利「太奈」々

止宇止良々一

に於て佐々木信綱博士は「しご」は「しだら」の訛であらうとされて（「解説」九一—〇頁、大正十三年十月）

居り、此の新資料は「日本古典全集」の「歌謠集」上

（昭和七年五月）へは覆刻所収されて（六七頁）あり、

又岩波講座「日本文學」の武田祐吉博士が「神樂・催馬

樂」（同年同月）にも指摘されて（二三頁）あるが、安

田喜代門教授が改造社「短歌講座」第九卷「修辭文法

篇」（同年七月）の「平安朝文法概説」（昭和六年十二

月）に於て（二七〇頁）記される如く、東に次いで筑紫

が方言色の相當大きい地方であつた事の反映として考へ

る時は殊に時代上から誠に貴重な文献となる筈である。

○同頁十五行 八七頁上 を補ふ。

○五四頁四行—五五頁十行 岩波講座「日本文學」の橋

本博士が「國語學概論」(下) (昭和八年一月)の第七章

「口語の變遷」を參照。

○五五頁八一—九行 富士谷御杖(明和八(一七七七)生)が(文政六(一八三三)歿)

「北邊隨筆」(文政十年刊)卷之一の「阿々志夜胡志夜」、

それを引用補足せる中島廣足(寛政四(一七九二)生)が「檀

のしづ枝」(嘉永六年(一八五三)刊)上卷の「にしのくにの歌」なき參

照。

○五六頁七—十行 東條氏の「方言研究の概観」（岩波

講座「日本文學」昭和七年六月）の二八頁特に十一行參

照。

○同頁十一—二行 雜誌「方言と土俗」第二卷第十二號

（昭和七年四月）の橋正一氏が「方言周圍論について」

及び「方言研究の概観」の三六一—八頁參照。

○五七頁一行 雜誌「方言」第二卷第一號（昭和七年一

月）の橋本博士が「國語に於ける鼻母音」參照。

○同頁二行 雜誌「日向郷土志資料」第四輯（昭和六年

九月）に於ける東條氏の論文（十八頁）及び「方言」へ

連載の服部四郎氏が論文「國語諸方言のアクセント概観」中第二卷第四號（昭和七年四月）参照。嚴密な意味に於て此の方面は金春元安（禪鳳）（享德三年一四五四年）の「毛端私珍抄」第二音曲や田宮仲宣が「橘庵漫筆」一名「東臚子」（享和三年刊）卷之五の記述を未だ幾何も出て居ない譯である。

○五九頁七行 「サルク」の語源説が「東臚子」卷之五に記してある。因に橘正一氏の御教示に由るに此の語の同系語と目される可き物が近畿、土佐に於て次の如く拾へるのであり、即ち語彙の特殊性肯定は危険である。

森彦太郎氏「南紀土俗資料」（和歌山縣日高町南部町、南紀土俗資料刊行會、大正十三年三月）の附録「方言訛語辭典」に

さーるく（あるく）（二七五頁）
しあるく（歩く）また、しゃるくともいひ、しゃあるくともいふ（二七六頁）

九州方言の特異性

しゃるく（あるく）（二七九頁）

「和歌山縣誌」下卷（大正十三年十一月）第四篇「風俗誌」（樋口功氏編）には伊都郡に

しあるく（散歩する）（五九九頁）

藤原久吉氏「方言訛語矯正便覽」（和歌山縣立紀北農業學校、昭和四年）には（一五頁）

歩む アユム しゃるく はつしゃるく

大田榮太郎氏「三重縣方言」（昭和五年四月）の「三重縣三重郷土誌」には

サレ。 來る（三三三頁）

「音聲學協會會報」第二十一號（昭和五年十二月）の森正俊氏の「北伊勢方言」には

サレル 行く 來る（四頁）

和歌山縣立粉河高等女學校「方言卑語訛語集」（昭和六年七月十日増訂再版）には

しゃるく 歩く（二九頁）

七五（七五五）

雜誌「高知教育」(高知縣教育會)第六〇七號(昭和八年三月)の橋詰延壽氏が「土佐方言集」七に

一三三四 サルク 廻る さわぐ (五〇頁)

尙語彙に就ては「國學院雜誌」第三十七卷(昭和六年)

第五・六・七・八・十一・十二號及び第三十八卷第一・

二號既出の宮良當壯氏が論文「南島方言と九州方言との交渉」があり、是は金澤博士還曆祝賀會「東洋語學之研

究」(昭和七年十二月)所收の安田喜代門氏が論文「九

州方言及び琉球方言における代名詞の研究」(昭和六年

十月)を讀み合はす可きである。尙雜誌「鹿兒島教育」

(鹿兒島縣教育會)第四七〇號「鹿兒島方言研究號」

(昭和七年十二月)の武山宮定氏が「薩摩語と南島語の

比較」なごも參考とならう。

〇六〇頁 雜誌「館友」(神宮皇學館館友會)第二百八

十九號「母館五十年記念特輯號」(昭和七年六月)の

山下邦雄氏が「薩隅方言概論」に於ける(九五―六頁)

薩隅・兩肥・兩筑・兩豊・宮崎の五方言區に西及南の島

々を當分假に附屬させ度いゝ爲れる様な試は今後も枚舉

に暇があるまいが、東條氏が「方言研究の概観」に於て

(三五頁)九州の三大方言の中では薩隅方言と肥筑方言

とに類似が多いとされてゐるのは、「國語の方言區劃」

に於て(一七頁十三―十四行)鹿兒島方言に對する觀方を

考慮に入れても入れないでも、是亦面白い識別であるこ

思ふ。

〇六一頁 雜誌「國語教育」第十七卷第八號(昭和七年

八月)の原田芳起氏が重母音との變化に就て物された

論文「九州方言系統論に就ての一つの覺書」があり、特

に阿蘇郡の地位は豊日系となる點に注意。

〇六三―四頁 今迄に發表された雜誌資料は左の如し。

二行 「方言」第二卷第七號(昭和七年七月)の小倉博

士が「國語特に對馬方言に及ぼした朝鮮語彙の影響」

六行 「方言」第一卷第五號(昭和六年十月)の橋浦泰

雄氏が「肥前五島方言集」

十六行 「九大國文學」第二號（昭和六年十一月）の春

日教授が「甌島に遺れるマラスルミメーラスル」及び

「九大國文學會會報」第三號（昭和七年六月）の上村孝

二氏が「甌島方言集」。但し「方言ミ土俗」第三卷第七

號（昭和七年十一月）で橘正一氏が「方言雜誌合評會」

に由るこ（三八頁上）動詞マラスルなら各地にあるこ云

ふ。

同 「方言」第一卷第三號（昭和六年十一月）の福里榮

三氏が「山川町附近の方言について」

十七行 「方言」第三卷第三號（昭和八年三月）の鮫島

松下氏の「種子島方言集」

二行 「方言」第二卷第一號（昭和七年一月）の敷根利

治氏が「寶島方言集」

〇六四頁十六行―六五頁十八行 蜀山人の「増一話一言」

卷二十に存する「全浙兵制」の條には

乾隆四庫總目兵家類兩浙兵制四卷 明侯繼 國撰 予家藏全浙

兵制 三日本風土記 卷五 侯繼光撰 トアリ

こ見える。因に「方言」第二卷第九號（昭和七年九月）

で伊波普猷氏が紹介されてゐる「日本館譯語」や更には

「國語ミ國文學」第十卷第一號（昭和八年一月）の秋山

謙藏氏が「明代に於ける支那人の日本語研究」で示され

る日本語資料を對比する時、「日本風土記」の價値は益

々大なる筈であるが、此の卷之四の語彙は近く自分が

「方言」へ覆刻する豫定である。

〇六六頁―一十一行 土井忠生氏の御報告に由るミ刊本

はポドレイ文庫ミクローフツド家ミに一部宛存するのみ

でアジュダには無いさうである。尙「方言」第二卷第九

號（昭和七年九月）の同氏が「ロドリゲスの日本方言

研究」参照。因に西班牙人オヤングレン（一六八八―一

七四七）が西文もてせる「日本文典」四卷 （元文二年 一七二八）

は、新村博士の「メキシコ舊版の日本文典」（大正二年、

「南蠻廣記」四一四頁)や従つて東條教授の「方言研究

の概観」(一七—八頁)、或は大正十三年の「東洋文庫

展觀書目 甲」の説明(一九頁)は兎に角、その第四卷

第八章に「日葡辭書」の西譯マニラ版(寛永七年

出したABC順の語彙があつて「上」^{かぶ}、「下」^{しも}の別が矢張

り葡西式羅馬字で記してあるが、特に方言記事は存せ

ず、全體として土井氏の御意見ではコリヤゾの「日本文

典」を基としてゐる様に見受けられる云ふ。

○同頁十二—三行 「續帝國文庫」第廿二編「漂流奇談

全集」(明治三十三年)所收記事の中で四編程は南九州

に關係するが、薩摩侍醫なる曾榮の「日州船漂落紀事」

(元祿年間の事件だが同冊所收の寛政元年日向人「無人

島談話」の附録)には所謂薩摩方言を註する物數語が見

える。

○同頁十四行 も佐 は も何れも佐賀藩士だが石田一

鼎(寛永六一元祿六)の薰陶を受けた ミ補ひ

同じく を削る。

○六七頁一行 「方言」第三卷第一號(昭和八年一月)

へ「^{鍋島}語葉隱」の難句略解」ミして自分が轉載した。

○同頁二—四行 「方言」第三卷第二號(昭和八年二

月)の大田榮太郎氏が「越谷吾山翁の位牌等發見に就いて雜感」参照。

○六八頁 リネ は リネー ミ トウンベリ は ト

ウンベリ ミ ウブサラ は ウブサーラ ミ變更。

○同頁二行 、 を附し 更に同人が「ウブサーラ王室

新文書」第五卷(一七九二)へ拉丁文もて發表した「日

本語解説」(二五八—七三頁)の中には なる文句を補

ふ。尙此の資料は自分が「方言」へ凸版覆刻豫定。

○同頁三—四行 三行へは を附し、四行は次の二

文に改める。

Nagasaki wa do guserinassurka ?

Kekkono tokoro deguserinassur.

○同頁五一六行 日本紀行の部分だけの なる十字は六行の「 の中間へ挿入す可きである。因に此の瑞典語の日本語彙は近く「方言」へ自分が覆刻の豫定。

○六九頁七一九行 「『小學方言講義』より」ミ題して春日氏が本誌第四輯へ其の研究の一部を發表された。

○同頁十一行―七〇頁九行 「方言」第二卷第五號(昭和七年五月)で自分は「ラナルド マッドナルドの『日英語彙』」ミして紹介及び覆刻した。

○七〇頁十一六行 英文第二版(一八七六)及び蘭文版(一八六八)は同じく百六頁、佛譯本(一八六一)は六〇―一頁にレオン バジエスが「此の形は辭書に無し」と簡單に註するのみ、獨譯本(一八七七)は未調査。

○七一頁二―三行 既に「國語教育」第壹卷第壹號(大正五年一月)へ東條氏は「方言研究の過程」なる最初の方言書目を發表されて居り、彼の文政十年(一八二七)の序ある櫻田權太夫が「方言達用抄」には「西國の方言

をも參照して居る」ミ指摘されて居るが(七九頁上)、

是は「方言」第二卷第三號(昭和七年三月)の「解題」

(三)にもある通り(五〇頁下)「仙臺叢書」第八卷

(大正十四年六月)所收覆刻には全然見られない。

○同頁十八行 「東洋學藝雜誌」ミ云ふのは金田一氏の想ひ違である事が龜田次郎氏の「國語學概論」(明治四十二年)に由つて(七七頁)察せられるが、即ち白野耕作(夏雲)(文政十年生一八二七)が雜誌「學藝志林」七卷(明治十三年七月)及八卷(同十四年六月)の論文「古代地名考」は其の儘「東京地學協會報告」第八卷第八號(明治十三年なるが十四年四月刊)へ「上代地名考」ミして轉載されたのであり、九州に關係しては熊襲、熊本の外に贈賂を「ソウ」(瀑布)、薩摩の薩を「サツ」(乾)ミ

する説が記されてあるのであつて、是等の要領は龜田氏が雜誌「歴史地理」第十七卷第六號(明治四十四年六月)への論文「維新後アイヌ語研究の先覺者……白野

夏雲翁」に於ても解るのである。

○七二頁三十一行 内閣文庫の明版には、自分の調査(昭和八年五月十日)に由るに、侯繼高こなつてゐる。

○同頁十一二行 版本は東洋文庫にも存する。

九大國文學第二號(昭和六年十一月)

○五五頁十一行 内閣文庫の明版よりも字體が崩れてゐる。

○五七頁四行 京大圖書館所藏の寫本は表紙に「田藩文庫」なる黒印あり、何れも丁付無き乾六十二丁、坤四十二丁の二冊より成り、坤の四十二丁目ウに

右日本風土記崎陽司牛込氏之所藏也延寶中勤役就其子孫某借寫

文政五壬午年霜月 宮崎成身

とある。水戸の彰考館にも寫本がある。

○同頁十四行―五八頁三行 此の原寫本と思はれるものが内閣文庫に存する。

○五八頁十四―六行 伴信友の「假字の本末」上卷之下に(「伴信友全集」第三の四百二十五―六頁)に引用轉載してある。天野信景の「鹽尻」卷之三十五も参照。

○五九頁十四行 最初「申さう」を解された春日氏も「無慙」に賛された。

○六〇頁一―八行 永田吉太郎氏が(私信)前半を「伴はうかよの」を解かれるのは兎も角、後半を「お出ぢろ」をされるのは無理であらう。

○同頁九―十行 江實ざう氏の御意見に由ると、山形縣東村山郡高たか搦村大字新町で用ふる「しよかきび」(良い氣味)に残る「しよ」(良い)の活用古形語尾は九州西及南部の「よか」のそれと同系である云ふ。八丈島方言の「―け」以上に眼新しい問題であらう。

○六一頁十一―二行 「日本亞細亞協會會報」第十六卷第一部(明治廿一年二月)に於ける王堂が論文「ルドリギシの寫音組織」(同二十年十月十二日講演)には(一

一頁)

標準的として寫音するにルドリギシは長崎音を採用した

を見え、又(一二頁)

西班牙の後繼者コリヤゾは(略中)長崎のfは既に當時或地方ではkを發音した事を明かに述べて居る

こある可否は兎に角、是を村上直次郎博士は「史學雜誌」第七編第六號(明治二十九年六月)の雜錄に於て

(七〇頁)半ば當り半ば當らざる論評を爲れ、又例へば

宮澤甚三郎氏の「日本語學」(明治三十七年)には(百四十五頁)

今より三百年許り前、西洋人の書きし日本文典(長崎指)あり、そは長崎の發音によりて書きし者なるが

ハ行音にfを用ゐてあり

と記してあるが、新村出博士は「國語に於けるF H 兩音の過渡期」(昭和四年七月)に於て(「三宅博士古稀祝

賀記念論文集」一八四頁、「東亞語源誌」三二三頁)

チャンバレン氏が(略中)ロドリゲスの綴字方を説明するについて、コリヤドの言に據つて、f文字が

採用されたのは長崎の方音に基いたものの如く解し

たのは固より當らない

と論評されて居る。

〇六六頁 雜誌「國語・國文」第貳卷第拾貳號(昭和七年十二月)の土井忠生氏が論文「吉利支丹文學者養方バ

ウロミ其の作品」(下)の「四」参照。

〇同頁一行 アルヴァレス は アルヴァレス と改める。七八頁十一一行も同様。

〇同頁十行一六七頁九行 「九大國文學」第三號(昭和七年二月)の土井忠生氏が「吉利支丹懺悔錄の方言」五

六頁四—十一行参照。詰り是は釅刻の誤であつて、原典に於ては矢張り標準語としての活用變化をしてゐるに過ぎないのであり、即ち九州方言の特異性は全然存しない

事になるのである。九州方言とか翻刻とか云ふ問題を離れて讀者は様々の事を考へさせられる筈である。

○七五頁三行―七八頁五行 土井氏の前記論文は必讀の文字に充つる。因に自分の態度は「九州大學新聞」第六十五號（昭和六年十月五日）の記事（三頁）や雜誌「文學」（岩波）第六號（昭和六年十一月）の「學界消息」で（五八頁）

（略前）貴重なる研究の結果（略中）該文學には九州方言要素は無しと斷定

なる文句は當時としても頗る迷惑を感じたのであつて、是は雜誌「國語・國文」第貳卷第貳號（昭和七年一月）の「雜誌要目」で（一〇八頁）

（略前）吉利支丹文學に於ける九州方言存在説を諸家の説を引用しつゝ、再吟味す

でなければならぬ事は自分が改めて辯明する迄も無い筈である。「薩道書志」（明治廿一年）第十二なる「日

葡辭書」が明治廿三年に上田萬年博士に由つて紹介せられ「國語のため 第二」（明治三十六年）に記録されて（一八五頁）以來、此の辭典が含有する「下」なる方言意識は例へば新村博士の「牛肉史談」（大正十四年、「琅玕記」二九二頁）や「うぶすな考」（昭和二年、同七頁）に於て既に指摘されてある譯であるが、雜誌「民族」第貳卷第壹號（大正十五年十一月）の橋本進吉博士が「三百餘年前の日本の方言に關する西人の研究」に見える（一一七頁下）當時の語彙の地方的相違を討究する事は土井氏に由つて此の感情的にも出来れば九州方言文學資料に算へ度い寛永版「懺悔録」に巧に運用され得た。その音聲さては語法迄さへ地方的特殊相を否定したがる言語地理學的原理を以てしても、最も力點の置かれた見られる「調備」なる語彙は例へば偶然同號で「近世に於ける九州地方の法制關係語について」提出される金田平一郎氏の努力の如きものが九州以外の地方から例

示される迄は此の場合常識的にもその特殊の色彩を全然抹殺され難いであらう事は何人にも是認されよう。尙土井氏が「方言」第二卷第九號（昭和七年九月）の「ロドリゲスの日本方言研究」及び「國語・國文」第貳卷第拾壹號（昭和七年十一月）、第拾貳號（十二月）の「吉利支丹文學者養方パウロ其の作品」に於てその補足が見られる。只自分は彼の所謂「京へ筑紫に關東さ」なる俚諺は文獻學上の價值は兎に角、現今では勿論だが當時に於てもその現實反映性を著しく疑ひ度い氣がするのであつて、「物類稱呼」卷五「なぜこ云事」の條や三馬の「麻疹與海鹿之辨」（享和三年）（一八〇三）にも引用されてある夷曲

大和かい西はあじかを關東べい都ござんす伊勢
おりやります

なき云ふ雜駁な方言標識にも劣りはしまいか考へるのである。松下大三郎博士の「標準日本口語法」（昭和五

年二月）に於ける「方言の依據格」（二四〇—一頁）は兎も角、九州では現在に至る迄矢張「様」さま其儘の訛形が行はれて居るのである。

助動詞「まらする」は今日に於てさへ九州が獨占して居るので無い事は橋正一氏の眼界に由つて分つたのであるが、康遇聖の「捷解新語」は既に例へば雜誌「帝國文學」第百八十五號（明治四十三年四月）の保科孝一教授が「關東べい」にも（三十頁上）九州方言資料とされてあり、小倉進平博士の「國語及朝鮮語發音概説」（大正十二年）や（六〇頁）同じく「南部朝鮮の方言」（同十三年）に（一九一頁）從へば少くも音聲に關して是は當時に於てさへ對馬方言要素を呈示する地位に在るらしく、然る限り三百年前の「九州方言の記録」を見做され得よう。

○七二頁—一二行 雜誌「國語教育」第十八卷第五號（昭和八年五月）より吉田澄夫氏が「天草版金句集」に題して二百七十五則の原文及び翻刻を連載。

○同頁九行―七三頁十行 一九一五(大正四年)の「日本亞細亞協會會報」第四十三卷第一部所載のデ・イムズ

・バートスンが「初期西日關係書目」参照。

○七六頁八―九行 「御國通辭」には(「南部叢書」第十卷五一五頁)

そふしたから かうしたさかいで

こ云ふ句例が見えるが、同系語なら廣く東北地方にも存する様である。併し勿論此の場合には彼の近畿方言の同時代口語資料として周知の「おあん物語」に只一回出て來る「さかい」を等しき標識に見做される可きであらう。

○七八頁二―三行 「新群書類從」第六「歌曲」(明治四十年八月)五二三頁 を挿入。

○同頁八―九行 土井氏に由るに刊本はポドレイ文庫に巴里國民文庫と葡國エヴラ公立文庫に一部宛あるのみであつて、アジュダには寫本、大英博物館のは西譯マニラ版であるを云ふ。

○同頁九―十行 「倭訓栞」後編十八卷(明治二十年七月出版、岐阜)には西國、九州、筑紫の名が散見する。

○七九頁二―三行 橘正一氏は「方言言土俗」第四卷第一號(昭和八年五月)で(三〇頁下)消極的ながら手柄だと思ふと評される。特に國文學者へ紹介し度い。

○七九頁五行 (新)は(改造社「沙羅の花」、新)である。因に松崎實氏の「殺生關自行狀記」(昭和五年

一月、日本評論社)には「まらする」が見られる。

○八〇頁十二行 田北耕也氏の御教示に由り 長崎人士は カトリック信者 を改める。

○八二頁二―三行 故語として の五字分を除く。東條氏に由るに少くも奈良、京都には存し又分布はもつと廣いさうであり、橘正一氏に由るに徳島縣にもある由。

○同頁四行―八三頁八行 俗稱追加二件

鞍手 クラデ。 平田鬼丸氏教示

上益城 カンマシキ 田北耕也氏教示

尙「音聲の研究」(音聲學協會)第V輯(昭和七年十二月)所載の拙稿「九州地方郡名現代發音」参照。

○八四頁九—十二行 雜誌「原理日本」(原理日本社)

第六卷第六號(昭和五年六月)の故齋藤吉彦氏が「九州方言オロの意味」参照。八六頁七—九行へも同様。

○八五頁八行 同書目所載(四六頁中)の大通辭柳藩錦悅山譯「柳川方言沔河沙一撮」は岩淵悅太郎氏に由つて

「方言」第三卷第二號(昭和八年二月)へ覆刻された

が、是は後に厚紙の表紙を附した美濃判七紙(墨付六紙)より成り、平假名交りの方言歌へ片假名で註解を加へた約五十句が記されてあるのであり、紙質等から見て化政(一八〇四—一八二九)以前には大丈夫行くらしく、内容も根幹的の九州方言助辭が大抵盛られてあるから、「都久志こまば」よりは遙に資料價值が高いのである。尙此の寫本を東大國語學研究室は本郷の井上書店から入手したのであると云ふ。

九州方言の特異性

○八六頁四—五行 第一卷第二號・第二卷第二號(同七年二月)・第五號・第三卷第三號(同八年三月)へ連載の「長崎版日葡辭書にあらはれたる方言資料」の中で九州即ち「下」の語は第二卷第二號・第五號及第三卷第五號の三冊へ所收。

○同頁六行 是は半紙半折の袋綴の表紙共十八丁分の和裝であり、表紙には「都久志こま波」、第一丁に當る始には「筑紫方言」こある。著者年代共に不明。

○同頁十一行 長崎版 は 長崎版及び媽港版 である。尙雜誌「史學」(三田史學會)第十二卷第二號(昭和八年五月)の土井氏が論文「長崎版日本文典と天草版拉丁文典」を参照。

文學研究第一輯(昭和七年三月)

○二六一頁九行 の「の間へ次の文句を補ふ。

「片言」には卷三「人倫井人名之部」の「みづからのとを」の條下に

豊後國ぶんごくにには。こ、。か、。こいふべ
きを。うも。うぎなき、云り

こあり、

○二六六頁十一行 左の文句を補ふ。

こあり、又(五頁)

(上)諸國方言物類稱呼の誤を、この中に正したることも
あり、

文學研究第二輯(昭和七年十月)

○九六頁六一九行 土佐少掾正勝が「博多露左衛門色傳授」(寛永五年一七〇八) 第一には

諸國をめぐり色里に、あそびひなびし國詞

「新群書類從」第五の六五三頁

○同頁十四一六行 春陽堂「日本戯曲全集」第五十卷な

る「初期歌舞伎狂言集」(昭和八年四月)では(二五一

頁)「つ」は脱してゐて見られない。

○九七頁十二行 保科孝一氏は(私信)「捷解新語」に

吉利支丹文學語彙ミが「九州方言に屬するもの」ミ考へたのである言はれる。

○同頁十四行 「ばい」は同じく語尾助辭「たい」ミ共に少く共今日では南九州には全然存在しないのである。

是は「關東べい」が東北地方をも包攝する現象ミ對比して見て九州方言が所有する多様性の一ミとして記憶される

可きである。因に松下博士の「標準口語法」に於ける

(三二七頁)感動助辭「は」の用法參照。

○九八頁十四行一九九頁一行 高野幽山(生歿不詳)が「誹枕」

三冊(延寶八年一六八〇)の下冊「肥前」の部に見える山口信章

(素堂)(寛永十九一六四二生歿享保元年一七二六)が詠んだ

長崎にて

入船や いな。さ。そ。よ。ぎ。て 焔の風

「日本俳書大系」第七篇「談林俳諧集」

(大正十二年十二月)四四六頁上

を志田義秀氏はその「俳文學の考察」(昭和七年三月、

明治書院)の「風の方位をいふ方言」に於て(四九七頁)長崎として見るこやはり巽風をいふのかを解される。

次に近畿國語方言學會第二回大會(昭和七年十月廿三日)の講演「滑稽本ミ方言」に於て頼原退藏氏が發表された資料中で吾人に關係あるものを紹介補足する。

江島其碩(寛文七元文元)(一七三六)歿が八文字屋本(遊女名よせ)傾城

色三味線(元祿十四一七〇一)の「湊之卷」第四「詞に角の

た、ぬ丸山の口舌(くちぎ)」に於て三十石船へ乗合はせた男三人

が酒宴の最中に

ひこりがいへるは、雞喰(しほりく)ふて酒をのめば雨降(あめ)に

合羽(かっぱ)着てさるくやうなこ、いゑる詞髓(ことばたしか)に長崎者

こおほへたり

と云ふ所がある。「さるく」(歩く)は前記の如く最早

九州獨特の語彙とは云へないのであるけれども、「帝

國文庫」第三十一編「珍本全集」上卷(明治廿八年四

九州方言の特異性

月)や(五三〇頁十五行)「近代日本文學大系」第五卷

「八文字屋集」(昭和三年九月)には(一六八頁六行)

何れも「歩行(あゆ)く」と改められてあり、「日本名著全集」

江戸文第九卷「浮世草子集」(昭和三年四月)や(三四

八頁上十三行)昭和版「帝國文庫」第一編「珍本全集」

前(三年十二月)では(三二七頁十五行)何れも「さる

・」を翻刻されてある點は此の場合看過し難い。

蕉門十哲の一人なる向井兼時(去來)(慶安四一六五二)

歿の俳句に九州地方的に見られる語彙が一箇存する。

此の人の甥なる風國(元祿十四一七〇一)歿の撰になる「泊船集」六

卷(元祿十一年)の卷之六には八月卅日附の書翰中に

長崎より來る去來子、書中に小倉にて七夕

のひる

七夕をよけてやた、が船躍り

た、は漁夫の女、船躍は雨乞なり

とあり、明和八年(一七七二)に蝶夢(享保十七一七三二)

八七 (七六七)

歿)が撰した「去來發句集」(安永三年刊)の「秋」には

筑前の黒崎にて、明日は此邊りのた。ごも

沖に出て、雨乞の誦し侍るこいふを聞て

七夕を よけてやた。が 舟踊

た。こは、此邊にて漁父の妻娘の事也。け

ふは七月七日の事にぞ侍りける

こある。是は井原西鶴(寛永十九元祿六年)(一六四二)歿が「好色一

代男」八卷(天和二年一六八二)の卷三「袖の海の香賣」にも見え

るは餘りに有名であるが、三田村鳶魚氏編「西鶴輪講好色一

代男」(昭和二年九月—同三年六月)の「卷の三」(同

二年十二月)に由れば(三〇及三二頁)伊豫其の他にも

存する事が知れるし、更に是が「母」を意味する時は、

例へば「物類稱呼」卷一に由れば出羽に存し、「補増補言

集覽」中(明治卅二年初版)には御所詞としての外に因

幡あたりには在る事となり、「言の泉」(明治四十一年

初版)補遺には中國の方言を記し、「改修言泉」(大正

十年)本篇には岩城國福島の方言をなつて居るし、それに菊池寛氏の「父歸る」(大正六年一月作)に類出する「おたあさん」は是亦周知の實例であらう。

〇一〇〇頁四行 「ばい」は九九頁所載例があるから兎も角として、「けん」「くさ」には左の補足がある。

「くさ」 穎原氏が同場所で指摘されたのであるが、澤露川事藤屋市郎右衛門(寛文元一六六一)生(寛保三一七四三)歿に同伴して

諸國を遍歴した止白堂燕説(寛文十一一六七二)生(寛保三一七四三)歿が筆録

になる「西國曲」七卷(享保二年一七二七)は卷之三・四が國曲の

部であり、各國の始に作者不知として國々の所謂方言を

詠み入れた一句が記されており、此の中で卷之四は筑前

・筑後・肥前・肥後・豊後・豊前の北九州六箇國の國曲

を収めてある。其の六首に於ける所謂西國の方言として

傍註あるもの、可否は兎に角、新村博士はその「異國情

趣集」(昭和三年、京都市、更生閣書店)に於て(二〇〇

〇頁)肥前國曲を採録されたが、自分に取つては卷之四

劈頭の筑前國曲に於ける

「コト云定也」
さればくさ 娘の華咲く 博多練 黒崎

「日本俳書天系」第十七篇「篇外」(昭和二年十一月)二三二頁上

が注目す可き文獻なのである。

「けん」 中山久四郎博士が「東京文理科大学紀要」第一年(昭和六年九月)の第三卷「唐音十八考」(同七月)に於て(一四―五頁及一九―二〇頁)舉げて居られる二文獻がある。

巢林子の時代物「大職冠」(正徳三年)の第二に於て在天法師が父の有風と共に唐人に變装して入鹿を討たうこそ館を訪れる時、在天は高向の立理に向つて

ばあ、君けんくるけん、くるめあめいたかり
んかんきう、(中略)ありしてけんさんはいろ

云々唐音を用ひてゐるが、是は古賀十二郎氏の「國性爺研究」(大正七年八月「長崎新聞」掲載)に由るこ、

九州方言の特異性

「君けん來るけん久留米飴板」に通はせたものであつて、即ち該地方の「けん」が記録されてある事になる。

江島其積が「國姓爺明朝太平記」六卷(享保二年)の二之卷第一「旅人の仕合吹付けた浦の唐船」に於て旃檀皇女が丸山の出島屋萬六主従三人に向つて弄する唐音の中にも巢林子が前記作品の模倣と覺える「君けんくるめいた」なる文句が見える。

〇一〇一頁二―四行 「ばん」「たん」は少くも今日では筑後河下流地方のみに行はれる結果、九右衛門の「長崎訛り」なるものを佐賀方言の飛地に求め、即ち是を諫早方言とする説が數年前行はれたが、古賀十二郎氏なごの御意見では今日では一笑に附せられて居るさうで、矢張り非九州人の筆になる架空的西國語と見る可きである云ふ。兎も角併しながら自分の提唱は此の爲には覆されない筈である。

〇一〇二頁七―九行 前記の中山博士が「唐音十八考」

八九

(七六九)

に對してその補正資料なると思ふ。

いふておこす。

○同頁十五行 原本(七行八十六丁本)では左の通り

「日本俳書大系」第十三篇「近世俳諧名家集」(昭和六年二月)五一五頁下

だてな風俗繪圖に替らぬでつちをつれて。毎日
八つの前後湯に入るは。上方者共九州共。詞付
がまぎらはし

○一〇三頁 行 原本では「返事」に振假名無し。

○同頁七行 原本(七行八十一丁本)では左の通り

ござんすまじりの茶のあいさつ

○一〇五頁九行 「日本隨筆大成」卷三(昭和二年六月)

月)にも覆刻(七四一頁)。

○同頁十三行 「日本隨筆大成」別卷(昭和三年四月)

上(七四頁)にも覆刻。

○一〇五頁六行―一〇六頁三行 大谷交教(土由)(歿

不詳)の「美佐古鮓」(文化十三)に錄されてある

春風や アマコマ走る 帆かけ船 和蘭陀人

あまこまは、あれこれこいふ事ぢやと

は翻刻本の「解題」(二二頁)や「國文學者一夕話」

(昭和七年七月、六文館)の志田義秀氏が「話外國人俳

句」に於て(四四頁)轉載紹介されてゐるが、古賀十二

郎氏の御意見に由つても、元來「アマ」は大家富豪の男

兒、「コマ」は獨樂を意味するけれども、「アマコマ」

は此の場合矢張り「これもこれも」云ふ意に用ゐるたも

のミ解されるさうである。因に沖繩語にも「アマー」

「コマ」なる對應慣用句が存するのを對比す可し。

○一〇六頁十二行 原本には三行に互つて

此くにはもふ きがなか ばしだ

○同頁十五行 頼原退藏氏は「長橋」でなく實在の「中

橋」にかけた洒落であるミ解される。因に三星社の「黄

表紙傑作集」(大正十五年六月初版)には(一三八頁)

「なが橋」を翻刻されてある。

○一〇七頁十行「の は」(天明元年)の

○一〇八頁六一十行 原本も此の通りであるが、雑誌

「文藝春秋」第十一年第四號(昭和八年四月)の市河三喜博士が隨筆「昆蟲、言葉、國民性」に見える(十二頁

第二段)「への濁りあるなしを矢笠しくいつたりして」云ふ文言は、偶然なら益々、自分に取つて面白い。

○一〇九頁五行 花街滑稽 は角書にする。因に「愧」は原本では「塊」もある。

○同頁七行 十月 は 十一月

○同頁十二―十四行 帝國圖書館所藏原本を自分が檢した(昭和八年五月十一日)結果、「嫁」を振假名があり、

此の外に――語彙は暫く措いて――今一句

今年な砂糖を、ふじか事登せ申ス
大ぶん

が見え、何れも三五兵衛の言葉である。

○一一一頁十三行 一二 は 少くとも三 と改める。

即ち六編のもの以外に左の通り。

二編(享和三年) 卷之上に於て沼津の驛から暫く道連にな

つた侍は「サア勘定の致そふ」位を除いては標準語で通して居るが、その供は「ネイ」「ネイく」と答へて居

る。是が爲に「東海道中膝栗毛輪講」上編(大正十五年初

版)では(三〇〇頁)侍をも九州筋の勤番らしいにしてゐるが、此の返事だけでは強ち西國獨特のものとは言へ

まいし、輪講に於ても(三〇二頁)大阪や讃岐にもある云ふ説が見えてゐるから、此の主従二人を西國者は

認めるにしても方言の特徴は餘り見えない譯である。

三編(享和四年) 卷之上で金谷の宿を出て菊川の坂に掛かる時出現する雲助の一人が僅少ながら九州言葉を發して

居るのであつて、即ち原本に

イヤよかことがある

云ふ大事な所を「輪講」上編では(五一―頁)「よい」を改められて了つてゐて問題にされてゐない。

八編(文化六年) 中卷に於て大阪新町の揚屋なる住半すまはんで野暮な西國侍が藝子を相手に七回程お國訛を出してゐる。

改刻本では九編卷之下に當り揚屋はよし田屋ぢやうに變改。

〇一二頁三行 四 は 七 であつて、即ち既記の外に左の通りであるが、自分の主張する「物類稱呼」抽出説は益々強く裏書される筈である。

初編(文化七年) 上卷では讃州船で播磨はりまの室の津に入る時、彌次郎、喜多八が連にしてゐた野州の五太平が頓死したので、皆がその死骸の始末を兩人に對して詰る所で、丁度乗合はせてゐた一人の西國侍が一回語る。

同じ卷で室の津の遊女屋を兩人が素見して居る時、藝子うゑここそして向から招れ違ふ大の男おの二人が何れも九州者くしゅうに見えて一回宛西國語を交はしてゐる。

二編(文化八年) 上卷で備前の下津井しもつゐに船がかりしてゐる時、彌次郎が饅頭に食ひ付かれるく、船中に西國がたの醫者が居合はせてゐて療治するが、都合五回口をきくので

ある。然る後に備後の鞆の湊で西國侍の出現となる。

以上の外に尙三編(文化九年) 下卷に於て木曾街道の高宮

川にさしかゝる時、十四五歳の小郎が小腰をかゞめて

「ネイ」と云ふが、「物類稱呼」卷五に近江で「ねい」

と云ひ肥前で「ない」と云ふなあるのなきは兎に角、是

は前後の關係から見ても西國語に解さなければならぬ必

要はあるまいと思ふ。尤も一九には九州方言の實感が全

然無かつたな云ふのでは決してなく、類出する肝要の

「ばい」なきは「物類稱呼」には載せられてないし、是

亦「物類稱呼」には録されてない「たい」は「東海道

中」六編の上編では三回程用ひてゐるのである。雜誌

「土の香」(愛知縣起町、土俗趣味社、謄寫版) 第五周

年記念號(昭和八年五月)へ投稿の拙文「吾山ごさん一九〇

の西國語」参照。

〇一四頁三行 こいて は こいて

〇同頁十四一五行 高師直(上州)、早野勘平(上總)、

おかる（奥州）、小の九太夫（信州）、かほよ御ぜん（駿州）、小の定九郎（肥州）、與市兵衛（播州）、おかる母（備州）、はら郷右衛門（肥前）の方言が各々滑稽な半身像の次に並べられてあり、原本では肥州は廿六行に互つて廿八句、肥前は十八行に十五句が配され、一九の方言が「物類稱呼」引用なる事が益々確められる。

〇一一五頁五行の作はの京都版作である。因に此の作品の西國語は肥前東北部及び筑後西部即ち筑後河下流地方のものに見做す可きである。自分は此の資料を雑誌「言語」（東北帝國大學言語學談話會）第貳輯（本年秋刊行豫定）へ稍々詳しく紹介する心算である。

〇同頁十行 叙に「定めて西國の言語」にあるのみ。

〇同頁十二—三行 「下愚鄙通辭」二冊は「新群書類從」の書目には擧げてないが、其の叙や凡例に表れる文言から察するに此の作者は可なり方言に興味を有してゐたらしい。「日本文學講座」第九卷の「方言研究」方言文學」

に於ける（一七五頁、改訂第十四卷二八三頁）東條氏の紹介は兎も角、九州方言として會話に實際表れて來るのは下冊の終の方に「豊後」者が極めて特色の薄い言葉を僅か二回用ひて居るのみである。尙「方言」第三卷第六號（昭和八年六月）の拙稿「下愚鄙通辭」に西國語を求めて」を参照。

〇同頁十四—五行 原本では「爰に九州の傍示杭はづれに、一村の花柳園あり」云々ある趣向である。

〇一一六頁四行—八頁八行 姉崎博士が「切支丹宗教文學」（昭和七年九月）の「序言」に見える（二頁）所謂清音、濁音、半濁音、九州音との關係問題は兎も角、音聲學上所謂半有聲音又はそれに近いものは現代九州に於ても少くも南肥前地方には存する様であり、「筑紫方言」にも（原本九丁、雜誌「方言」第一卷第三號六九—七〇頁）指摘されてある。尙「音聲の研究」第V輯（昭和七年十二月）以下連載の三宅武郎氏が「濁音考」は稍

々關係が遠いが讀み合はず可きである。

〇一八頁十一行 原本では「付」以外は振假名無し。

〇同頁十六行 博多仁和加の脚本集なきにも「ござつす」を以てする所が間々見える。

〇一九頁一行 今迄の所唯一の雕刻たるを削除す

る。因に Thunberg の拉丁文「日本語解説」(一七九

二)には *passi* の *S* を二箇重ねて九州音を示したものが三箇見える。

〇一九頁九—十行 原本では「今一時過る」に於て

振假名の「く」に白圈を用ゐるのに注意。

〇同頁十一行 「さなへ」は少くも現代九州では「サ

ネ」にも寫され短く發音してゐるが、同じく助辭の「ゲ

エ」(動詞連用形の後へ附いて目的を示す)なきも「博

多小女郎波枕」には「見がい」(見)にあり、「物類

稱呼」なきに示される「あんがい」(あのやうに)「こ

んがい」等を想ひ合はせるも、重母音 *ei* は昔は九州方

言に於ても是等の語例に實在してゐたものか、或は中央

人の語感から當時に於ても既に變化してゐた *ei* が架空

的に、否寧ろ理論的に原形に再構されて文字に姿を留め

たのであるか、頗る考慮す可き音聲事象の一であらう。

〇二〇頁二行 原本では「待申」に振假名はない。

〇二二頁十三行 原本では「壹人」の振假名無し。

〇同頁十四行 原本では「貴顔の得」に振假名あり。

〇一二二頁六行 原本では「板へ水の流」に振假名。

〇同頁九—十行 原本では「ゆへ」

〇同頁十一行 原本では「じやる」

〇同頁十三行 主人は「可候」の事である。

〇一二三頁十行 原本では「尾花志忠太」

〇同頁十四行 原本では「條」

〇一二四頁一—四行 此の侍は又「ナイく」にも返事を

をして居る點を注意。

〇同頁五行 原本では「三味撰」と讀ませてある筈。

〇一二五頁六一八行 「國學院雜誌」第三十九卷第一號
(昭和八年一月)の尾崎久彌氏が「日本郷土文學概論」
(五七一八頁)参照。

〇一二八頁十三行 「伊勢道中不案内記」に同じく何れ
も自筆初稿本は不明であるが、兎も角稿本は殆ど不可侵
とも云ふ可き佐賀市は鍋島侯爵別邸内の内庫所に目下保
管されてあるのである。

文學研究第三輯(昭和八年 二月)

〇七〇頁一行 同「明治大正文學全集」第三卷、改造社
「現代日本文學全集」第二篇 なぎはわざみ省略した。

〇七一頁十一行 長谷川辰之助(二葉亭四迷)(明治元
(一八六四)生)の而も十年前曾讀の作品に九州辯が盛ら
れてある事を守屋長氏に教へられたのは嬉しかつた。

「四人共産團」(明治三十七年二月、雜誌「文藝
界」掲載、博文館「二葉亭全集」第三卷、改造社「現代
日本文學全集」第十編所收) 翻譯物に九州語を採用し

九州方言の特異性

た趣向も眼先が變つてゐて敢て當時と言はず一寸例があ
るまいが、全篇に活躍するキルヂャーガの風姿はよく描
き出されて居り、原文の妙味を巧に寫し得たらしい手腕
も推される。

〇同頁十一―四行 次の資料を挿入する。

「吾輩は猫である」(明治三十八年一月―同三十九
年八月、雜誌「ホトトギス」掲載、岩波「漱石全集」第
一卷所收) 勿論稍々標準語化してはゐるが多々良三平

の所謂唐津訛りみされてゐる典型的九州方言が全篇を通
じて「五」ミ「十一」ジに顔を出してゐるのは、種々な
意味に於て前記の文學者ミ好對照をなす筈である。

〇同頁十五行 昭和縮少版は第三卷である。

〇七二頁六一七行 次を補ふ。

「黒い眼ミ茶色の目」(大正三年十二月初版、新潮
社「蘆花全集」第十卷所收) 「其二 協志社」ミ
EPILOGUE を除く全章に互つて僅か宛肥後の言葉が

九五 (七七五)

用ゐてある。

○同頁八行 ルビは えのたけ

○七三頁五―六行 若山繁(牧水) (昭和三(一九三三))

歿) がその故郷の日向方言を交へた散文を補正出来なかつたら故人に對して頗る禮を缺く所であつた。指摘者尾

崎久彌氏及び調査者大田榮太郎氏に謝意を表する。更に

自分が長崎圖書館で檢した結果、日向方言資料は左の通り。

全集第六卷は隨筆・小品を、第七卷は更に小説を所

收。

「古い村」(明治四十年六月、雜誌「新潮」掲載、

改造社「牧水全集」第七卷所收) 父との對話中に二三

語ある小説。

「山の變死人」(明治四十五年、「牧水全集」第六

卷所收) 典型的日向方言の見える小品。

「狐か人か」(大正四年十二月、雜誌「日本少年」

掲載、全集第七卷所收) 小年小説である。

「私と酒」大正五年初秋、全集第六卷所收)

「おもひでの記」(大正七年五月九月、全集第六卷

所收) 某短歌雜誌に出たもので、土俗的な語彙小許。

「老人」(大正九年一月、雜誌「青年改造」掲載、

全集第七卷所收) 語尾に「ばい」の見える小説。

「秋草の原」(大正九年八月以降、全集第六卷所收)

僅少な方言。

「雪のおもひ出」(同右) 幼時聞いた父の詞。

「故郷の正月」(大正十三年以後、全集第七卷所收)

父の言葉。

「姉への手紙」(同右) 祖母の言葉。

「金比羅参り」(大正十四年十月以降、全集第七卷

所收) 幼時の思ひ出を綴つた小品。

「鮎釣に過した夏休み」(同右) 父を描く小品。

尙左記も見落せないと思ふ。

「こんぎの旅」(大正十三年、全集第五卷所收)

従兄の言に「行きまつしう」みだけ見える紀行文。

「九州めぐりの追憶」(同右) 母の言葉。

「解説」(昭和二年、全集第十卷所收) 漱石の

「我輩は猫である」の多々良三平の九州辯を引用語釋。

○七三頁九行「改は」、新潮社「白秋詩歌選」

改

○七四頁一二行 左の作品を補ひ度い。

「東京景物詩及其他」(大正二年七月初版、大正五

年七月増補改題「雪と花火」、「白秋全集」第二卷所

收) 此の中の「S組合の白痴」の「隣人」に僅かなが

ら存する。

○同頁七行 「白秋全集」第八卷に所收された。

○同頁八行 左の二篇を記して置かう。

「お話・日本の童謡」(大正十三年十二月初版、「白

秋全集」第十八卷所收) その「愛嬌挨拶」は柳河の舊

曆の十月の年中行事を記したものである。

「フレップ・トリップ」大正十四年十二月―昭和二年

二月、雑誌「女性」掲載、昭和三年二月初版、「白秋全

集」第十五卷、改造社「新選北原白秋集散文篇」所收)

樺太の植物を題名にした此の紀行文にはまじしてY君

の佐賀辯(實は唐津辯)が數十回寫されてある。

○七五頁十五行 明治四十五年七月

○七六頁四行 を除く。

○七七頁一行 東京毎夕 は 毎夕社

○同頁七―八行 雑誌「土の香」第九卷第一號(昭和八

年三月)の抄出で知つた佐々木邦氏の九州各地の方言

は、著者自身が旅行先で寫したものを後から土人に見て

貰つたのであるさうで仲々巧なものである。

「ぐうたら道中記」(大正十一年一月―十二月、雜

誌「主婦の友」掲載、大正十二年一月單行、大日本雄辯

會講談社「佐々木邦全集」第十卷所收) 全十四回中、

第一回には熊本の「おてもやん」節採録、第十二回には

博多で車夫が博多辯を五回ミ佐賀で車夫が「ない」を三回ミそして宿の女中のお芳が佐賀辯を十三回程、第十三回では唐津で車夫が標準語の外に唐津辯を五回程ミ長崎で蜀山人の例の方言歌「長崎の山」云々が見え他に二三の語彙が論はれてゐるのみであり、第十四回では熊本で方言歌ミ下男の徳さんの方言が三回、往來の學生の方言が四回、「おてもやん」が説明されてあるし、田鶴子女の熊本辯が一回見える上に、人吉邊からの車中に於て極少の鹿兒島訛を交へた普通語が四回許存する。

○七八頁二行 岩屋村 は 嚴木村大字岩屋

○七九頁一行 長田幹彦氏も本格的な肥後言葉を用ゐて同名の創作を昭和七年十一月の「週刊朝日」へ連載された。是を所収した春陽堂「日本小説文庫」二四一

(昭和八年五月)にも見える(二頁)祖父君なる穂積の遺稿「肥後語原考」は新資料である。

○同頁四行 仔 は 係

○八〇頁十一行 尤も時に有聲音で發する地方もあるが、此の場合には本州東部方言の語尾ミの混同であらう。因に是は「俚謠集拾遺」から(三四七頁上)の轉載。

○八五頁十一二行 祝部至善氏及びその弓友なる故柴田清藏(隆造)が合作して世に出したのであつて、不體裁に掛けた普啼齋。稜天は祝部氏の命名に由ると云ふ。

○八七頁十二行 前例があるのである。

○八八頁五行 謎々は方言資料ミして博多の一名物。

○九〇頁六一八行 「日本亞細亞協會會報」第三十八卷

(一九一、明治四十四年)第三部掲載のデー ビー

サンサム氏が「長崎地方方言慣習考」に見える(九四頁)

“Bei” to iu koto zwo fimeu bei—Fukuoka no monoga waran bei”

ミ云ふ博多俚諺の眞偽は確める暇が無かつた。

○同頁九行 八四頁十四—五行へ左の如く改めて挿入

一 原田東洲 「博多仁和加」第壹編 明治三十五

年三月 眞海書店 絶版 袖珍型 本文二〇一頁

熊本市出生の原田平八（東洲）が奥付の名に彼の長子胡一郎氏を以てした本書は印本として上梓された脚本集では最初の物として記憶す可きであり、題目序二頁宛の次に編者の「はしがき」四頁があつて簡單に博多二和加の由來を叙べてある。續いて木版彩色の續繪二頁が挟まれ、次に目次一頁、其の裏には上欄外に右から始まる横書の「「詩書は先づ博多言葉を研究せよ」なる題下に縦書で▲符十四箇に由り區切られる方言が（）内の標準語を以て説明されてある。本文は「長命の種蒔」（一一四二頁）「金比羅詣」（四三一六一頁）「蓄音機」（六二一一二三頁）「風船フナ試し親子の再會」（一二四一七一頁）「月やく會社」（二七二一一〇一頁）の五篇からなり何れも各俄師の組合の作である事は他の大部分の脚本集と變らないが、用語には大分注意を惹くものが見られる様であり、「ござッす」（百二十頁）は兎も角「まッする」

九州方言の特異性

（六十一頁）は無視出來まいし、其の他幾多純粹ならざる所謂博多又は福岡の言葉に交つて豊前生れの易者なる若狭の守まもが十三回程語る（四十七―五十三頁）方言は九州語としては特色が薄い代りに却て文獻上では仲々得られない資料として見る面白くなつて來る。豫告（二二二頁に當る）にある第貳編は發刊されなかつたのであつて、此の事は内野氏の「新編博多仁和加」（大正十年）の「例言」に由つても確められるのである。

○同頁十行 此の脚本作者は川丈座經營者なる長尾丈七氏である。

○同頁十一行 看板業を本職とする博多ッ兒の平川梅吉（ペン梅）氏がその還曆自祝の記念に著はされた「博多郷土藝術年中行事」（昭和六年四月 博多演技俱樂部 非賣品 四六判 本文一二六頁）は數多くの巻頭寫眞や主要記事は兎も角、吾人に取つては巻頭の二頁分に見える同じく博多俄師なる生田權次郎（徳兵衛）氏の博多辯

九九

（七七九）

もてせる「口上」や本文所收の平川氏の論文「博多仁和加」(一一一〇頁)及び脚本「不景氣挽回策」(一一一三五頁)「無學の女」(三六一五五頁)二篇が必要であつて、特に論文に於て博多仁和加の由來や模様を説明された後で(九一一〇頁)此の種の土俗を他郷に求めて比較考察して見るミ奥州鹽竈の「ざつみなー」、栃木縣南部の「談儀」、島根縣邑智郡の「託舞」^{たたく}、四國高地に近い村の「なばれ八幡」ミ共に所謂惡口祭に屬するものであり要するに博多仁和加は惡口祭、盆踊、浪人の寸評即ち落首、博多氣質の四つが複合したものであるとされてゐるのは頗る傾聽す可く廣く紹介しなければならぬ。

○九二頁一—三行 由緒ある肥後狂句に就ては其の後入手した資料に由つて少く共次の補足をする必要がある。

抑々肥後米ミ共に有名なる國俳・狂句即ち一に肥後俳ミ合稱されるものは、或は今より三百餘年前加藤清正時代に始まつたのであり軍陣の暇に爲す事も無き徒然の餘

り肥後方言を以て俳句を試み消閑の具ミされたのであると言はれ、或は細川氏入國以後に起り幽齋や三齋なきの名君が下情に通じる爲に工夫されたものだミ傳へられ、或は江戸の川柳ミ前後して天明頃に起つたものらしいミ語られる。兎も角肥後俳は俳諧から發生したものである事は疑無くその起源は戰國の末にあり、狂句の前句附の起つたのミ略ぼ同一様な軌道を踏むたものであらうが、或は是を模倣したのかも知れない。そして起源に關する前三說中で第一說の加藤清正が陣中の消閑に始めたミ云ふのが最も眞に近いらしく、清正が肥後國を領するには本來の豪族達を平定した後でも殘黨が随分多く従つて城中に於ても宿直^{とよ}の家臣等はなか／＼嚴重で居眠も出來ず徒然の餘り肥後言葉を弄して歌を作り出したのが今日の肥後俳の起源であらうミされてゐる。今一說の細川氏時代に創つたミ云ふ説は強ち誤ではないけれども細川氏以前に在つたミ云ふ證據は、清正の嗣子の忠廣が徳川氏の

爲に封を沒收されて出羽の庄内に移され多少の家臣を従へて行つたが彼等の間に肥後俳なるものが流行する事となり、全國で此の俳句を有するのは肥後と庄内とであつて即ち細川氏以前に肥後俳の存在してゐた事が推されるのである。併し細川氏入國以後に肥後俳が兎も角形式を備へるに到つたのは是亦否定出來ないのであり、幽齋も三齋も有數なる歌人であつたのである。清正時代と同じく新領土ではあり宿直の夜詰は嚴しく行はれ目覺は矢張り入要であつた。

肥後俳なるものは細川氏入國に由つて其形式を全するに共に二種の區別を生じたらしい。發生時代より久しからずして「品」ミ「俗」即ち國俳ミ狂句ミの二種に分れた。何れも本俳の句のやうに切字ミ云ふものがなく、四季の有無を咎めない代りに「冠り」がある。國俳の方は五七五調で整へるのであるが、狂句の方は十八字でも廿字でも甚しきに至つては三十字以上に互るものさへ存す

る。今一二例を示せば國俳の句は

道平ら、駒の櫻に付く吹雪

側へ聞、誘はぬ友も貝の浦

狂句の句は

蟲の聲、小便しきつて泳へこる

時も時、咳のきア出た氣の毒

の如くである。此の二種の發生前後に就てはより肥後的なる狂句の方が早いらしい。細川氏入國以後多少雅言の調和を計つて今日の品ミ俗ミの混合物が出来たが次第に雅俗は離れる様になり、一は俳諧にかぶれて來るに同時に他は天明の川柳に依て一層味方を得たのである。

肥後俳の發達に關しては以後の事は不明である。天明以後の人ミ考へられる百兒（又は百爾）なる者が最古の點者であり、其の門下からは友蛾が出た。是等を肥後俳の中興ミ云ふ。其の後に本名を續眞素人ミ呼ぶ曲浦が出て是は國俳の芭蕉翁の地位を占めるのである。此の人は

曲亭馬琴を崇拜した結果風格上からも品を重んじて狂を卑しめ、此の邊から品と狂とは點者を異にするに至り、品の點者は多く曲浦の流を汲んで今日に及ぶが狂の點者にして有名なのは今日存せず皆自稱宗匠のみである。

肥後俳の流行範圍に就ては、國俳は肥後全體に擴つて居るが狂句は元來熊本の町に限られて居り而も新町口調と古町口調とがある位であるが、此の頃は狂句も各地方で流行し出した。

狂句には車付とて一句の立句の結びの五字を次の「冠り」にして一句を續けてその手順を繰返すものがあり、淡島付とて極めて淫猥な句を用ゐるものがある。

國俳をやる者は狂句を卑み、狂句をやるものは國俳を及ばずとて寧ろ排斥する。併し國俳の用語は肥後言葉でもなく又純然たる雅言でもなく、調は融和せず想は没風流、文字の省略や語格の不法が甚だしい。かくて狂句こそ肥後の平民文學とす可きである事を忘れてはならぬ

い。狂句は第一に好笑の方面に想を構へ、第二に語の短縮を巧妙に行ひ、第三に擬人法を盛に用ふる所にその價值が存するのである。

さて肥後俳の文獻に就ては短冊や稿本の類は暫く措いて印行された物を求めるに、「九州日々新聞」には明治三十二年八月十五日から池田信止撰として「第一回募集肥後國俳披露」が連載され以後何回も募集され、「九州新聞」に於ても明治三十五年から掲載された。單行本としては次に羅列するものを追加しなければならない。何れも熊本市内發行である。

一 臥雲 「肥後俳句集」 明治十四年 絶版

是は「二」に(三一頁)僅かに紹介されてあるに過ぎず即ち臥雲は出雲産れで久しく熊本に住むで居た僧であり其の序文には拙巢なる僧か

俗而非俗、雅而非雅、肥之國風是也

云々と書いてある事が分るが、中山氏に由るに國俳のみ

を所収した小冊子であつて當時久正社と稱する國俳連五十名許りの團體が續曲浦なる宗匠に率ゐられ臥雲は連中の一人と推せられること云ふ。

二 中村露華 「肥後俳句」 明治三十五年一月

長崎次郎 絶版 袖珍型 本文一二八頁

中村事^{つよ}氏が編纂に成り、本文は同氏が八木田梅雄氏に聞いたものを綴つた「肥後俳句」(一一五二頁)なる論文——此の要領を前に紹介したのであるが——と附録たる「肥後國^つ俳集」(五三一七六頁)拾録二百六十四句及び「肥後狂句集」(七七一一二七頁)拾録六百十句をから成る。

三 中山霞山 「肥後狂句集」 明治三十六年五月

九州日々新聞 絶版 袖珍型 百頁内外

中山氏の手許にも亡失して了つて居るが、豫定は一千句以上を拾録し、尤も發行部数は一千部であつた。

四 松本奇妙 「肥後狂句狂歌集」 明治四十年四月

九州方言の特異性

月 絶版 百頁程

松本意三郎氏が編纂發行したのである。

○九四頁一行 「くさい」は肥前や筑後でも用ひる。

○同頁六一八行 岩波講座「日本文學」の柳田國男氏が

「口承文藝大意」(昭和七年四月)の八頁十四行参照。

○九八頁三行 喜多村節信^{よしのぶ}(天明四〇二七八四)生)の「嬉

遊笑覽」(文政^{十三}序)序卷六上「音曲」も同様。

○同頁五行 「温泉」だけ 温 泉 割書にし度い。

○同頁七一十一行 原文には平假名のルビがあり、又却

つて正しからざる句讀點になつてゐるが九行のルビは除き、十行の 妓等 は妓共等 である。

○同頁十六行 た一 は た(五五—七頁)一

○一〇二頁八一九行 島津久基氏の「羅生門の鬼」(昭和四年五月初版)所収の同名の論文(大正十一年)及び

その餘話に由るに、羅生門傳説は英國のペイオウルフ物語に似て居り従つて肥後の河童退治物語にも關係がつい

て来る様である。自分の疑義も是で一先づ氷解した。

〇一〇三頁十六行 東條氏が自分に報告された(昭和八年二月)沖繩圖書館所藏の「大和口上」なる資料は半紙

十五枚に記された琉球人の日本語習得用の問答體會話書であつて、翁廷棟玉城親方盛林が文政元一六年の表書があるが、「ごしこ」(幾何)を除いては「御座る」「申す」で一貫する平凡な標準的口語である。因に此の伊波氏舊藏寫本は自分が近く「方言」へ覆刻豫定。

〇一〇四頁四行 單に會話の箇所のみでなく地の文迄をも意味されるのなら誠に至言である。(昭和八・六・五)

正誤

九大國文學第一號

の國語

六九頁十四行 偶然

九大國文學第二號

の口語

五四頁八行 偶然

五四頁十四行 見本

五四頁十五行 見本

五五頁五行

六一頁十四行

六三頁一行

六五頁十五行

七五頁十行

七七頁十三行

七九頁十三行

八三頁十一行

八六頁十二行

文學研究第一輯

二六六頁十二行

文學研究第二輯

九六頁七行

九九頁十五行

一〇一頁二行

四行

一〇一頁一行

一一九頁四行

文學研究第三輯

七八頁八行

一〇〇頁八行

一〇二頁二行

思難

メル

音語

専門

専門

ルビの

上編

若槻

ウア

再刻

ルビの

類

ルビの

批評

追加

穎原

問題

大江

得難

メル

言語

専門

専門

前編

岩槻

ウア

改刻

顔

顔

批評

追加

穎原

問題

大江

腕

以上